

打倒コロナで地域が結束！ 人々の想いが繋がる“街のワクチン” 「銀座もの繋ぎプロジェクト」について (老舗和菓子店「木挽町よしや」三代目店主 齊藤 大地氏)

1. 背景

日本で新型コロナウイルスの感染が拡大してから、約1年の月日が経った。その間、観光業界では、コロナ禍に対応すべく、様々な新しい取組が生まれた。苦境に立つ生産者や飲食店、土産物店を支援しようと、特産物のついたオンラインツアーが誕生し、ECサイトが活性化した。そうした中で、打倒コロナを誓い、お金を介することなく、SNSで個々の商品を紹介することで店を支援し、街を盛り上げた取組がある。銀座で100回にわたり、店舗や企業の商品を物々交換してエールを送り、その模様をTwitterで発信した「銀座もの繋ぎプロジェクト」だ。

本取組をベストプラクティスとして取り上げるのは、とてもシンプルなメソッドながら、発起人の街を愛する想いが広く賛同され、地域を巻き込み、大きなムーブメントを起こしたそのプロセスが、他地域における新たなネットワークの構築や連携による相互理解の強化、及び特産品のPR等に参考になると考えたからである。

2. 「銀座もの繋ぎプロジェクト」発足のプロセス

令和2年4月2日、「銀座もの繋ぎプロジェクト」(以下、「同プロジェクト」)が発足した。発起人は、100年続く老舗和菓子店「木挽町よしや」の三代目店主・齊藤大地さん。同プロジェクトを始めたきっかけは、同年3月31日に老舗弁当屋「木挽町辨松(べんまつ)」が、152年の歴史に幕を下ろす決断を下したのを知ったことだという。多くの企業の焼き印を預かる「よしや」の元には苦しい現状を訴える生の声が届き、「このままでは銀座の多くの店舗が休業や倒産に陥るのでは」と危機感を募らせたという。

「木挽町よしや」(以下、「よしや」)も、1日で約2,000個のキャンセルが発生する等、コロナ禍の影響で前年に比べて売上が9割近く落ち込んだ。しかし、そんな中で嬉しい出来事もあったという。前述のキャンセルにあったら焼き1,000個を、多くのレストランを有する三笠会館がすべて買い取ってくれたのだ。銀座、特に「よしや」がある東銀座エリアに古くから受け継がれる助け合いの精神。三笠会館がよしやを助けてくれたように、自店だけではなく他の多くの店舗のために何かしたいという思いを募らせた齊藤さんは、以前SNSで他店の商品を紹介したところ反響が大きかったことから、同プロジェクトのアイデアを思いついた。「単に商品を紹介していくのではつまらないので、次はどんな商品に交換されるのか興味をもってもらえるように『物々交換』としました。微力ながら、コロナ禍が収束した際に銀座に足を運んでもらえるきっかけになれば嬉しいという想いで始めました」。

そして4月2日、斉藤さんがアイデアをTwitterで発信したその日、第1回目の物々交換が行われた。初回は、「よしや」のどら焼きと老舗和菓子屋「銀座菊廼舎（きくのや）」の銘菓「富貴寄（ふきせ）」と物々交換をした。その後、手ぬぐい、あんぱん、胡蝶蘭など次々と物々交換が進み、助け合いの輪が大きくなっていった。

「銀座もの繋ぎプロジェクト」のルール

- ① 銀座エリアにある・または銀座にゆかりのある店舗や企業等と商品を物々交換する
- ② PRの機会を最大限活用するため、「自慢の商品」を出していただく
- ③ 感染防止のため、斉藤さんが仲介人として店舗を訪問し、物々交換を行う
- ④ 交換した商品・参画した店舗や企業を「よしや」の公式Twitterで紹介する



【公式】木挽町よしや 🍡 @kobikicho_y · 2020年4月2日
【物々交換プロジェクト】

本日よしやのどら焼きを1名様に差し上げます。
お渡しの際、御社・貴店で扱っている商品と交換させて頂き、その商品をTwitterで紹介させて下さい。
助け合いの輪が大きくなりますようにまずは行動してみます。

※詳しくは下記をご覧ください。

#小さな店に出来る事 #拡散希望

店や倒産を余儀なくされているお店が多数あります。
沢山の会社様の焼印をお預かりしている当店は、日々そのような現状を生でお聞きし、非常に胸を痛めております。
何かお役に立てる事はないか、何もしないよりは一歩前に進みたいと考え、当店では次のようなチャレンジをしています。

※ 終了時期はコロナが収束した頃
※ 最後の商品は国が東京都へ皆様の連名で寄付させていただきます
(希望者を募りその他の商品も受付予定)
※ ご質問のある方はDMへメッセージお願い致します

Twitterで必ず紹介させて頂くこと、これだけです。
今一度、素晴らしい商品や物を皆さんに広く知ってもらいたく微力ながらご紹介させていただきます。これ以上、閉店や倒産はして欲しくありません。
皆さんで素晴らしい物(輪)を繋げていきたいです。



この投稿に対して、
380件のリツイート、
18件の引用ツイート、
550件のいいね、があった
(令和3年3月4日時点)

3. 発展のプロセスと地域の繋がりによる相乗効果

参画したのは、和菓子店や飲食店だけではなく、ホテルやクリニック、宝石店、服飾関係までと多岐にわたった。斉藤さんがお声をかけて参加店舗を見つける場合もあれば、店舗や企業から参加したいと連絡がくる場合もあったという。感染には人一倍気を使い、基本的には自転車で銀座を巡り物々交換をしていった。4月24日には、地元の経済新聞に初めて取組が紹介され、5月4日に第18回目として歌舞伎座と物々交換すると大きな反響を呼び、Twitterで298件の「いいね」がついた(令和3年3月4日時点)。斉藤さんは、「歌舞伎座のあたりから広く注目を集めるようになりました。メディアにも多く取り上げられ、有

難かったです。初めは「よしや」のある木挽町界隈で50回くらい続けば良いなと思っていたのですが、気が付いたらどんどん大きくなっていきました」と回顧する。

想いは広く賛同され、8月14日に参画店舗・企業は100社に達した。100回目を迎えたところで物々交換は休止するが、その後も同プロジェクトは形を変えて大きく発展していく。まずは8月に、プロジェクトと物々交換100回目を記念してUNIQLO TOKYO店でチャリティーTシャツが販売された。第20回目でユニクロ銀座店に繋がった際に、斉藤さんの方から打診をしたところ快諾いただき、100回目に繋いだUNIQLO TOKYO店での販売に至ったという。売り上げの一部は、銀座の町会や商店街の連合組織「全銀座会」に寄付され、銀座の街づくりに役立てる予定だという。12月には松屋銀座で、プロジェクトの歩みと参画企業を紹介する「もの繋ぎプロジェクト展」が開催され、来場者特典として参画全店が掲載されたマップが配布された。松屋では、その後も、お正月のタイミングで参画店舗によるコラボ福袋の作成や、バレンタインのタイミングで参画店舗を巡るお買い物ラリー（1,000円以上お買い上げでシール贈呈、枚数に応じて景品をプレゼント）の実施など参画企業を繋ぐ企画が開催された。

また、松屋以外でも参画した店舗間でコラボ企画が行われており、お互いを知ることで街中回遊策やコラボ商品の開発などのアイデアが生まれ、コロナ禍においても地域が活性化している。「相乗効果があってすごく良いですね。街の中で、コロナ禍に対応しようとする協力体制があるのは心強いです。横に繋がれたこと、地域が団結して一つに繋がれたことがすごく嬉しいです」。



写真左：銀座もの繋ぎプロジェクトのポーズ「助け合いの輪」



写真右：チャリティーTシャツ。参画した店舗や企業のロゴがプリントされている

4. 同プロジェクトの今後と「銀座ひと繋ぎプロジェクト」

地域を一つにし、街を元気にした“街のワクチン”として話題を集めた同プロジェクト。齊藤さんの元には、多くの地域から問い合わせの声が届いたという。そして、令和2年12月に「鎌倉もの繋ぎプロジェクト」が、令和3年2月に「浅草もの繋ぎプロジェクト」がスタートした。両地域とも地元を愛する若手が街を元気にしたいと齊藤さんの元を訪れた。メソッドを教えるにあたり、「大切にしたいポイント」、「大切にしてほしいポイント」を話したという。

大切にしたいポイントは、「お金を絡ませないこと」。地域を盛り上げたいという想いで始めたプロジェクトにおいて、お金が絡むと穿った見方をする方も出てくるため、お金はかけない・徴収しないことをポリシーとした。参画費をお渡ししたいという申し出もあったが、断ったという。

大切にしてほしいポイントは、「所属団体の垣根を超えて実施すること」。同プロジェクトは齊藤さんお1人で実施されたが、観光協会や商工会等で実施する際も賛助会員の店舗に限定せず、垣根を超えて物々交換をしてほしいと伝えた。横の繋がりを作ることが地域を盛り上げることに繋がり、物々交換を見る側の楽しみにも繋がるとの考えからだ。

どちらも、同プロジェクトのロゴの色を変えて活用し、想いを繋ぐべく、展開している。

一方、発足の地・銀座では、令和3年1月にプロジェクトに心を動かされた演出家の宮本亞門氏とともに、「銀座ひと繋ぎプロジェクト」として新しい展開を広げている。「ものから人へ、想いを繋ぐ」をテーマにして、銀座にゆかりのある人をつなぎ、彼らからのメッセージを日々Instagramで発信している（令和3年3月4日時点で、160名を超える方が参加）。さらには、clubhouseで毎週日曜日に「みんなで作る銀座MAP」として配信も始めており、コロナ禍が収束するまで、銀座を盛り上げ続けたいという。

【公式】もの繋ぎ・人繋ぎプロジェクト（Instagram）フォロワー：901人

【公式】木挽町よしや（Twitter）フォロワー：2,380人

（令和3年3月4日時点）

<おわりに>

取材をしていく中で感じたのは、齊藤さんの街を愛する熱い想いでした。この取組はとてもシンプルながら、参加店舗の調整やTwitterでの投稿文章の執筆・確認等、労力を必要とします。「銀座ひと繋ぎプロジェクト」においても、齊藤さんが銀座ゆかりの方の元へ行き、撮影し、メッセージを配信されており、本業もある中でプロジェクトに取り組み続けるバイタリティに驚かされました。人との繋がりを大切に、自分の想いをまっすぐに伝えるその姿勢に、多くの店舗や企業の方の心が動かされたのではないかと思います。その行動力に感銘を受けるとともに、シンプルな方法だからこそ、どの地域でも実践でき、鎌倉や浅草のよ

うに受け継がれていくことが同プロジェクトの魅力であると感じました。

「銀座だからできたのではないかと思われるかもしれませんが、どの地域にもその地域ならではの魅力、強みがあります。銀座も、他の商業都市のように大きなデベロッパーはいません。ビルのオーナーや地主が銀座を守って発展してきた歴史があり、連携する風土があったのがうまくいった要因の一つかもしれません。『ないもの』に焦点を当てるのではなく、地域の特徴や『あるもの』に焦点を当て、コロナ禍においてネガティブになるのではなく、今できることを探して実施していくのが大切だと思います。鎌倉や浅草のように、実施してみたい地域があればお声をかけてください。街が好きな人がいっぱい出てくれば、お互いに切磋琢磨して、日本がどんどんよくなっていくのではないかと思います」。

同プロジェクトは、コロナ禍により観光客が減り、販売先を失った特産品やお土産のPRとして活用できるかもしれません。お互いを知ることで新しいアイデアが生まれ、新たな需要を喚起する取組へと繋がるかもしれません。地域に新たな繋がりが生まれること、そして相互理解が進むことが、今後の観光振興に役立つのではないかと考えます。前述の斉藤さんの言葉にある通り、今できることを考える、その姿勢がいかに大切か、取材を通して感じました。鎌倉と浅草の事例も楽しみにしながら、今後の「銀座ひと繋ぎプロジェクト」に注目したいと思います。



- 【取材協力先】 「木挽町よしや」3代目店主・斉藤 大地氏
【取材日時】 令和3年2月15日
【関連リンク】 【公式】もの繋ぎ・ひと繋ぎプロジェクト (Instagram)
https://www.instagram.com/ginza_monotsunagi/



(地域振興部事業課 野村)